2025
vol.44
Apr

黄河の森
K F G

発　　行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
代表理事／金　　啓 功
編集責任者／小 川 良 太
〒650-0011
神戸市中央区下山手通7-11-12
福建同郷会館内
TEL／FAX 078-360-2779
E-mail:mail@kouganomori.com
URL.http://kouganomori.com

「住吉山手植樹地　第Ⅱ地区の活動を開始」

ああ あの大河 太古より 流れる誇り
ああ その緑 永久に たやさぬ心
燃えたつ生命 ここに ここに

CONTENTS

P.2　六甲住吉山手植樹地の活動
六甲山クリーン&グリーン活動
絵本からのメッセージ ㊴

P.3　地形と土地開発史
阪神・淡路大震災から30年を迎えて

P.4　誌上「歴史散歩②」
大化の改新の詔の近畿

六甲住吉山手植樹地の活動　新用地で着手（Ⅱ地区）

六甲住吉山手の活動地は、2005年から取り組んできました。会が発足した翌年から20年間の活動の結果、残りスペースも少なくなってきました。残ったスペースも土壌状態が悪いのか、ここ数年間に植えた苗の成長不良・枯れるものが目立ちます。イノシシを初めとする獣害もありますが、水はけの悪さ・礫層など土壌の悪さが影響しているものと考えられます。

そこで今年よりこれまでの活動地の上流側、2023年に完成したダム地での植樹に取り組むことにしました。同地はこれまでの活動地のダムの一段上になり、建設工事により新たにできた土砂溜め地です。今年最初の活動として、３月１日に初めての植樹を行いました。当日は六甲砂防事務所より支給された苗木30本を初め資材と共に、当日参加いただいた会員５人で手分けして植えました。

苗木は「ウツギ・クマノミズキ・ムクノキ・エノキ・ヤマアジサイ」の各６本です。植え付けは例年通りの作業でしたが、今回の用地は工事で山肌を削ったところであったので岩盤や角礫層に当たり手こずりました。新しい用地は工事が終了して２年経過していますが、まだ表土（腐食土層）が形成されていないため、苗がどれだけ活着するのか懸念されるところです。今回からは樹種名を記入した、プラスチック製のプレートを各苗に装着しました。

Ⅱ地区での植樹が始まりましたが今後も年数回の手入れが必要となります。これまでの地区（Ⅰ地区）での下草・増えてきた根笹の刈り取りなどもこれまで通り手入れを必要とします。多くの会員の皆様の参加をお待ちしております。

支給された苗木･竹支柱

苗木に名札を装着

作業開始

竹支柱が並び植え付け完了

六甲山クリーン＆グリーン活動

六甲山植樹（植樹・下草刈り）

Ⅱ区１期

●開催日時　**令和７年６月７日(土)**
　　令和７年10月４日(土)
●集　　合　ＪＲ住吉駅南広場　（午前９時）
●服　　装　長袖･帽子･運動靴
●持 参 品　弁当･飲み水･軍手･タオル

絵本からのメッセージ39

「きみにありがとうのおくりもの」

児童文学者　畑 中 弘 子

作・絵：宮野 聡子
（教育画劇）

「きみにありがとうのおくりもの」は、感謝の思いを伝えあう、仲良しのこりすとくまくんのほほえましいお話です。

こりすとくまくんは森のはずれの洞穴に住んでいました。こりすは掃除や洗濯をし、おいしいごはんを作ります。くまくんは庭の手入れや野菜作りに精出します。一緒に散歩に出かけ、きのこや野いちごを見つけると、相手を思って摘みました。

ある日、食事をしている時、くまくんが突然こりすに言います。「いつも　ありがとう。きれいなお部屋、お日様のにおいのするシーツ、美味しいご飯を用意してくれて」そして、さらに付け加えます。「ありがとうって、きっと、うれしいときに　いうんだね」。とたんに、こりすは弾んだ声で言いました。「それなら、ぼくにも　いっぱい　あるよ！」。庭に咲いたきれいな花や、美味しい野菜や、テーブルに並んだお皿やコップも君が用意してくれた……。「きみの　ぜんぶに　うれしくて、きみの　ぜーんぶに、ありがとう！」。文も絵も心温まる絵本です。

地形と土地開発史　阪神・淡路大震災から30年を迎えて

今年の１月は阪神・淡路大震災から30年を迎えました。30年という時間の経過は世代交代が進み、体験・防災知識の共有・希薄化に対し、その継承活動の報道が多く目につきました。昨年の１月１日には能登半島地震が発生し、その地形の特性・過疎地といった複合する課題もあり復旧・復興の歩みの進まない現状を目の当たりにしているところです。

会報40号の高橋学氏の「環境史・土地開発史・災害史②」では阪神・淡路大震災における地形と被害状況の関連性について説明されています。神戸市の中心街では旧河川跡の軟弱地盤でのビルの倒壊が目立ちました。バスが宙吊りになった西宮市内と共に注目を集めた、阪神高速３号神戸線の倒壊現場の神戸市東住吉区深江本町を中心に、地形と過去の人々がどのように土地を利用してきたかを振り返ってみます。

① 砂堆の高まり阪神深江駅前

高橋氏は地形分類図に各地の発掘調査成果を基に地震被害を重ねた結果、震度７の地域は縄文海進最盛期（7,400年前）の海域と海退後に形成された湿地域（軟弱地盤域）と一致することを明らかにされました（同記事図①）

深江地区は芦屋川の河口の西岸に当たります。六甲山南麓の地は谷から流れてきた中小の川により形成された扇状地が重層して形成されています。山麓からは緩やかな傾斜を描きながら先端は海岸にまで達しています。縄文海進時（7,400年前）に海は海抜５ｍ前後、現在の国道２号線付近まで達していたと推測されています。この地域で国道２号線から海岸方向に目を向けると、現在でもかつての海岸への緩やかな傾斜地形が見て取れます。さらに地表面をよく観察すると数10数㎝の凹凸が認められます。この堤状の高まりが砂堆と呼ばれる地形です。この地が海底にあった時代に海中の沿岸流などで運ばれた砂により、海岸線に平行して形成された堤状の高まりです。図①　当地域を含み広く見られる特徴的な地形です。この砂堆地形は海水が現在の海岸線まで後退した後も地表面に残り、砂堆間の凹地は後背湿地・滞水域となります。その痕跡は現在もこの地域の用水路として見ることができます。この地域では1980年代からの再開発により、それまで想定されていなかった沿岸地域の遺跡の発見が相継ぎ、先人による活動の跡が明らかになってきました。

最初に姿を現すのは、海進時から数千年たった縄文時代後期のドングリ（食料）貯蔵穴（本庄町遺跡）が２号線から80ｍの地で発見されています。ここは海岸へ続く傾斜地にあたります。この時期では海面がどこまで下がっていたのかは明らかではありません。その後、弥生時代になると最も海に近い砂堆上に遺跡が出現します。北青木遺跡では弥生時代前期の溝跡が土器等と共に発見されています。また直ぐ近くでは銅鐸も発見されています。弥生時代も終末になると、深江北町遺跡では現在の地表下近くで円形周溝墓といわれる集団墓が12基発見されました。図②　これらの遺跡は同じ砂堆列上にあります。当時の海岸は現在とほぼ同位置であったようです。同遺跡では周溝墓群の背後の堤間低地では奈良時代の水田跡が発見されました。この水田の埋没状況を見ると、洪水による花崗岩の砂で埋没しては何度も再建されている状況が見て取れます。中・近世になるとこの最も海岸に近い砂堆上には街道（浜街道）と集落（旧深江村）が営まれます。この状況は阪神間に渡って見られ、「灘五郷」もこの街道沿いにあります。一方砂堆間の低地は湿地・滞水域となるため雨季には洪水のき危険性を孕んでいます。このため深江村では集落の西側で砂堆を横断して海への排水路を設け洪水から守っています。図③　1989年の秋の台風では砂堆間の低地に当たる市道が冠水しました。先人達は地形の違いに注意を払っていたのでしょう。

② 深江北町遺跡（県営深江団地）

③ 低地からの排水路

倒壊した高速道路橋は芦屋川西岸の潟湖（ラグーン）から始まり、約600ｍ西の深江村の砂堆にかかったところまででした。当地のような沿岸部の軟弱地盤域では、砂堆上は相対的に災害からは安全な場所といえそうです。（当記事は阪神淡路大震災30年を迎えるに当たって、被害の激しかった地域の一つである芦屋川西岸・深江地区で、高橋学立命館大学特任教授による臨地講演を計画していました。しかし氏の急逝で中止に至りました。氏の連載記事を基に筆者が同地の開発史を記しました。）

会員　小川 良太

会費・緑化支援金等協力者のお名前（2024.1.1～12.31現在）

●順不同・敬称略

石　嘉成	許　永坤	林　同福	宮島昭周	池田　智	蒋　政茂	谷川清隆	㈱阪急・阪神ホテル
呉　慶藝	佐藤正子	陳　明徳	樽岡千栄	四方田文夫	村井隆行	劉　明	㈱大木工務店
李　雲精	李　琛	竹本由美	西川鎮恵	堺屋和夫	李　家昌	王　華銀	花田印刷
安本昭久	村上鷹夫	石　玉球	池田久仁子	吉川政和	半田憲治	木村　健	中華会館
一木　仁	中谷安廣	楊　震雄	青木　明	平野　勲	王　永発	㈱モーリヤ	
江　洋龍	金　啓功	何　慧美	永倉弘一	三角修一	幸田悦麟	㈱東栄商工	

誌上「歴史散歩②」 大化の改新の詔の近畿 「赤石の櫛淵」の位置について

会員
小川良太

1．古代の近畿

乙巳の変（大化の改新）後の政治制度改革の一つとして畿内制度が取り入れられた。古代の中国では王宮を中心に方五百里四方を、王の直轄地域（特別行政区画）とする考えがあった。この地域を近畿と称した。中国ではその範囲は距離をもって規定されたが、地形の変化に富んだ日本では山・川などにより領域を定めた。「日本書紀」孝徳天皇の大化二年詔で「東は名墾の横川（名張市）、南は紀伊の兄山（和歌山県伊都郡）、西は赤石の櫛淵、北は近江の狭狭波の合坂山（大津市）」と規定された。

2．赤石の櫛淵とは

大化の詔の中で畿内の西の境とされたのは「赤石の櫛淵」であった。しかし、その具体的な位置・原義については未だ特定できていない。解明の手掛かりとなる「クシブチ」を想起させる又は関連する地名は、神戸市西部から明石市にかけての地域では見出せない。これまでも様々に検証・議論されてきたが、いまだ確論は見ていない状況である。しかし大方の一致するところは、現在の神戸市の須磨から垂水にかけての海岸域であり、かつ「櫛淵」の名称より「櫛の歯」状に凹凸する海岸線ではないかと推測されてきた。しかし当該の海岸で「櫛」と表現できるような凹凸のある地形は見いだせない。

最初に「クシ」についてみると、粧具の「櫛」と表記されている。櫛は古くは縄文時代の遺跡からも出土し、朱・黒色の漆を塗り精巧な装飾を施し死者と共に埋葬された例が多い。その後、弥生・古墳時代においても多くの出土・埋葬例がある。そこからは櫛には単なる粧具としてだけでなく、強い呪能があるものと考えられていた。このような観念に基づいて櫛字が当てられたのではと推定できる。そこで櫛に霊能があるとするならば、「櫛」を「奇し」と読み替えることができる。「櫛」を「奇し」と理解することは道教研究者の福永光司氏が提唱しておられ、瀬戸内海沿岸を中心とした西日本一帯に見られる「串木」・「串本」などの地名の「串」も「奇シ」と理解できるとしておられる（「探求 日本の道教遺跡」朝日新聞社 1986）。そして「串」字の地の多くには秦の始皇帝の命令により不老不死の仙薬を求め、童男女三千人を伴って東方海上へと船出した道士「徐福」が上陸した地との伝説が残っており、その背景には神仙思想の強い影響が窺われる。「奇シ淵」即ち「霊妙なる淵」とすると、当地が機内（ウチツクニ）の西の境界と観念されたことには何か意味が込められていたのではと考えられる。

「淵」とは海・川などの水深があり、淀んでいる場所とされる。神戸市から明石市にかけての海岸には、遠浅の砂浜が多く海水浴場の適地として知られるところである。中でも須磨海岸は古来「白砂青松」の地として多くの歴史事象の舞台となり、様々な伝承などが語り継がれてきた。今も夏季には多くの海水浴客が訪れる場所である。ところが、この砂浜の西端では背後の鉢伏山が屏風のように立ちはだかり、海岸の様相が一変する。そこは山の尾根端が急崖をなして海に迫り、砂浜は消え波が崖の裾を洗っている。そこは深い海である。この地形は塩屋まで続き、その後垂水に近づくと再び砂浜の遠浅海岸となる。この須磨・塩屋の中間では、近世まで摂・播の境界とされてきた「境川」が海に流れ落ちている。この海岸地形の変化は、畿内からの旅人の目には境界を感じたであろう。

3．「櫛淵」の背景

乙巳の変（大化の改新）があった７世紀後半から８世紀は、倭・百済軍が白村江の戦闘で大敗を喫し百済の滅亡を招き、唐・新羅との間に緊迫した状況の時期であった。倭は大王のもとで律令制度を導入し、中央集権国家・富国強兵策をとろうとしていた時代でもあった。そのため大王権威の高揚を図り、支配理念として、仏教と共に道教思想も取り入れられた。当時、道教は唐の歴代の皇帝の尊崇を受けていた。その唐文化・政治制度をモデルとして取り入れたのが日本の朝廷であった。同時に「天皇」号も取り入れた。天皇号は道教における天帝のことである。天智天皇に続いて律令制度を推し進めた天武天皇の諡号「天淳中原瀛真人（アマノヌナカハラオキノマヒト）」の「真人」とは、道教の最高神「天帝」に仕える最高位の神仙の名称である。また万葉歌人達も「大君は神にしませば天雲の雷の上に廬りせるかも」（巻３ 柿本人麻呂）と歌い、天皇・王子達を神と称揚する歌を多く詠んだ。

山陽道は陸路と共に海上交通が重要な手段であった。このことは「日本書紀」の記事や多くの万葉歌からも窺える。中でも明石海峡周辺を航海することを主題としたこれらの歌群は、畿内への特別な憧憬が根底にあるように考えられる。このことは神である天皇の住まう大和を中心とする畿内が、神仙境とも観念されていたと考えることができる。

4．海の境界

瀬戸内海は海流の速いことで知られている。ところが干満の変化により潮流の方向が変わる間は、潮流が消え静止した海面となる。まさしく須磨・塩屋間の深い海は「淵」となる。この人知を超えた自然の営みに、人々は神を感じたのでは。これが近畿の西の境界を「櫛淵と」呼称した由縁と考えられる。

「須磨・垂水間の海岸地形（明治18年陸測図）」